



筑紫女学園大学リポジト

台湾現代文学における「微型小説」への視角

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/993

台湾現代文学における「微型小説」への視角

石 其 琳

Viewpoint on Short Short Stories in Modern Taiwan Literature

Kilin SEKI

前 言

これまで世界華文文学の視点から、中国本土および香港地区以外の華文が主言語でない東南アジア地域を含めて多くの微型小説作品を取りあげ、それぞれの地域作家たちの創作における政治、社会と文化的背景の問題点と特徴性を研究してきた。そして華文文学の重要な発信地の一つである台湾地区においては、その現代文学全体の伝承の歴史背景と発展を研究し（注1）、特に時代的特徴性をもつ「探親文学」（注2）を取りあげた。だが同地域において、これまで「微型小説」の創作と作品に対し具体的に取上げていないため、本論は華文微型小説研究の一環として、台湾地区作家の「微型小説」を対象にする。

台湾地区は、世界「微型小説」自体の発祥と展開に深く関わっているにもかかわらず、これまで取りあげたほかの地域と歴史、政治および文化伝承背景と異なるため、実際「微型小説」という名称は使用されていない。今回はまずこの点を踏まえて、微型小説の作品集の継続研究として、中国微型小説学会総策劃で編集された「世界華文微型小説名家名作叢編」—台湾港澳地区卷（上海文芸出版社 1996）を中心に、台湾作家の作品を取りあげ、さらに近年台湾における微型小説の進展について考察する。

I 「極短篇」の名称について

台湾地区において、微型小説創作の実態は確実に存在しているが、しかし現地では、このジャンルの作品に対し、現在中国本土を含めて一般的多く使用している「微型小説」の名称は使用されず、代わりに「極短篇」という名称が通用している。この点について、すでに拙作「中国現代

文学における『微型小説』への視角」(注3)に、「微型小説」という文学ジャンルの成立過程、名称の定着過程と文体の検討、さらに文学表現と芸術性の問題、文学賞の定位などについて述べており、ほかに中国以外の地域における「微型小説」成立についての章に、台湾地区の状況を述べているので、ここでは省略したい。

台湾地区は微型小説の発展において、実に重要な役割を担っている。1967年頃、台湾の彭歌と丁樹南の両氏がいくつかの「小小説」の創作理論の書籍を翻訳したため、すでに「小小説」が注目され、新聞にも創作発表の場として大いに提唱されていた。1978年「極短篇」の名称は新聞「聯合報」副刊編集者である症弦氏が正式に「極短篇」の専門コーナーを設け、翌年さらに「極短篇」の小説賞を設置、また選集を出版することにより、この文体の創作が注目されたのである。以後個人作家の極短篇集が多くみられ、1987年新聞「中華日報」が「中華文学賞」の中で特に「小小説創作賞」の項目を設けたことで、各出版社（聯経出版社、中華日報、中国時報）も頻繁に個人小小説の作品集を出版し始め、外国作品の翻訳及び創作理論の研究も盛んになりはじめたのである。台湾文学界において、この文体の創作は定着しただけではなく、その後、世界各地の華文文壇へ影響を与えたと言われている（注4）。だがこの創作範疇の名称については、「小小説」、「掌中小説」と「極短篇」などがあるが、80年代に入り、有力な爾雅出版社系列に個人作家の極短篇集が出版されている。のちに大手出版社晨星、皇冠なども続いて、多くの極短篇集が出版され、中国本土からも「台湾極短篇小説選」が出版されたのである。現在台湾では、「微型小説」の名称はあまり見かけられないが、その同視できるものとして、「極短篇」または「小小説」が通用されている。

II 作品集の名称と取りあげる理由の背景

さて、この章において、本論の研究対象である「世界華文微型小説名家名作叢編—台湾港澳地区巻」の編成と取りあげる重要な理由背景について説明する。

まず名称について台湾部分担当編集者の一人で著名な作家である隱地氏は、その「序1」の文に、台湾では微型小説通称「極短篇」であることを説明し、創作について説明する際、「微型小説」と「極短篇」の名称を交差して使い、同氏も「爾雅極短篇」(注5)の作品集を編集したと述べている。だが、この作品集のタイトルが「極短篇」ではなく、「微型小説」の名称を使って上海文芸出版社から出版されたものである。実際アジア地域が世界最大の華文微型小説の本拠地であり(注6)、華文文学の読者を持つ最大の市場である中国から見れば、中国本土への視野は欠かせないのである。またここでは「極短篇」の創作範疇において、「微型小説」の名称は、中国現代文学の一ジャンルとしての位置づけが確定されている。本作品集には台湾作家の作品だけではなく、香港、マカオ地区の作品も同時に収録されることで、世界華文文学で通用する「微型小説」名称の一貫性があることを考慮して、より世界各地の読者がなじみ易く、広く読まれるためには、「微型小説」の名称で出す配慮は必要であろう。次はこの作品集を取りあげる重要な理由背景に

ついて述べる。

この作品集は1996年に出版されたのである。上述のように、台湾では1967年頃から、すでに「小説」または「極短篇」という作品の創作が注目され始め、後に新聞などの媒体が作品発表の場を提供しながら、作品賞まで成立させることによって、創作の風潮を巻き起こしながら社会へ広まり定着したのである。70、80年代の創作状況を検視すると、かなり有力な作家たちがこの創作範疇に参入しているし、多数の「極短篇」小説が発表されている。台湾現地の新聞社「聯合報」は極短篇の作品集を第1集（1979年）から第4集（1983年）まで出版している。そして個人作品集だけではなく、後に張春榮氏の「極短篇の理論と創作」（1999爾雅出版）など極短篇創作理論と研究の著作も含めて出版されている。

今回、取りあげる作品集の編集者が「序文1」の最後に、台湾作家の作品選出について、最初11人の作家各5篇収録する予定だったが、数篇の作品の字数が「微型小説」としての字数を超えたため、臨時的に取り換えたとの説明が加えられている。要するに、この時期は台湾文学界において、極短篇創作の成長と発展に関して重要な時期であり、その後、台湾社会に定着しながら、世界各地へ影響を与えたのである。

1991年台湾で同じ編集者の隱地氏から「爾雅極短篇」が編集出版されており、後に「世界微型小説名家名作叢編」に収録された多くの作品は、すでに「爾雅極短篇」にも選録されたのである。この微型小説集の収録作品の大半が同時期の作品であり、作者11人の愛亞、雷驥、鍾玲、邵儻、袁琼琼、陳幸蕙、陳克華、衣若芬、鄒敦伶、思理、隱地は、それまですでに個人極短篇作品集を出版していたのであり、彼らは多数の長、短篇小説の創作実績をもっている。作家としての地位が定着しているなか、極短篇創作活動にも力を入れていたのである。当時の台湾の創作環境を考えれば、特に東南アジア地域の微型小説作者と違い、創作を専業にしている作家が多く、彼らの活躍が極短篇創作にあたえた影響は大であつたと考える。

以前から中国国内においては台湾の微型小説作品が注目され、すでに「境外文学」として台湾地区の作品と明記した1986年古継堂編の「台湾極短篇小説選」（海峡文芸出版社）があり、または香港の作品と一緒に収録している1987年鄧開善編「台港微型小説選」（湖南文藝出版社）も見られる。さらに台湾の作品も取りあげ、世界華文微型小説の視野から、上海文芸出版社が1992年「世界華文微型小説大成」を出版し、2004年「世界華文女作家微型小説選」も出版している。当然この2冊の作品選集に収録された多くの台湾作家の作品は、上述した11人の作家たちの作品も多く選出され、今回取りあげる作品集の名称通り、「名家名作叢編」と名付けする意味もここにあったと考えられる。

Ⅲ 台湾80年代の文学環境について

今回提起した作品集に収録されたものを検視すると、創作年代が出版される90年代以前であり、また作品のテーマと創作表現の意識が中国本土以外の華文学域のものとは相違性がみら

れる。以下はまず作品の創作年代における台湾文学成長と発展の社会的背景について考える。

文学の発展は、その時代の社会的環境の動向に沿って、政治、経済、文化の要素から影響を受け、文学活動及び作品の創作に様々な形で表現されるのである。1949年以來の台湾の政治、特に70年代以後では、外圧から受ける挫折と内部的激動との境遇に直面したなどの詳細について、すでにほかの論文で触れており（注7）、ここでは省略したい。研究対象である作品集の創作と編成が主に80年代であり、より作品の創作意識が理解できるため、ここではまず80年代の台湾の文学環境について説明を加える。

50年代以後の台湾は長期的に経済発展へ集中したため、社会の文化的建設が欠乏した後遺症が80年代に至って続々と露呈されている。1981年政府により「文化建設委員会」が設置されたにもかかわらず、それほど効果は得られなかったのである。しかし70年代に国連からの脱退など外交面での挫折に直面しながら、内外からの政治的負荷が社会に劇的変化をもたらせているのである。1960年代から90年代の間、政府の十大経済建設政策の実行と電子産業の発展などから、社会は工商業隆盛の成果へ導いたのである。当時「亜州四小龍」の一員と称された高度経済力を持つ台湾は、87年国民党政府が戒嚴令を廃除したたことにより、社会も開放的風潮へと展開されたのである。社会環境の変化は、文学の創作意識と空間を拡大させ、多くの社会問題の露呈を促し、タブーとされた問題意識の壁が突破され、創作活動が多元化へと邁進したのである。研究資料（注8）によると、この時期に出版技術の進歩から出版事業がより隆盛になったというのである。難しい文学出版市場において、80年代の文学書籍の出版は五千六百種の中、エッセイと小説が最も多く、内容で特に人気あるのは、短小なものの極短篇の小説とエッセイが市場を占めている。この事実から、当時の有名作家たちが極短篇創作に力を入れ、多くの作品を産出した背景がうかがい知れる。また政治的解禁は、中国本土との文学交流の展開にもつながり、それまで台湾では上述した「探親文学」の成立とルーツ探しに関わる文学活動表現の実績がみられたほか、中国文化大革命以後に出現した「傷痕文学」（注9）及び新時期文学作品の多くが台湾で出版されたのである。今回研究対象の作品集が上海の出版社から出たことも、この時代背景と深く関わっていることを示唆している。

IV 作品から見る創作の特徴性

作品集の「台湾編」には11人の作家の作品が収録されている。その11人の作家のうち、女性が7人で半分以上を占めている。収録された作品の数は少ないが、創作のテーマをみると、それなりに時代の特徴が現れていると考えてよい。以下は、具体的に作品を簡略訳で取りあげ、そのテーマと創作内容の特徴について考察を進める。

作品①：「電話をかける」 愛亜（1945～）作

二時間目の授業が終わって、多くの生徒が急いで校門にある公衆電話へと並んで、家に電話を

して、自分の忘れ物のノート、筆、牛乳買うお金…を届けてほしいと伝えるのだ。一年生の教室は、校門のすぐ横にあるのだが、体の小さい黄子雲は、その公衆電話の列を羨ましそうに眺めている。みんなは電話をかけているが、自分は低学年生が電話を掛けやすいように置いてくれた木の箱に登ることはなかったのだ…

この日彼は決心して、母親に電話するのだ。興奮して電話かける列に並んだ。皆は授業が始まるのを心配して、慌てて受話器を握って話していた。授業の鐘音が聞こえ、前の人はかけるのを放棄して教室へ、彼はすぐに木箱に乗って、左右誰もいないことを確認してから受話器をとった。

「ママ、僕よ、雲雲よ！」徘徊して待つ人はほぼ全員退散した。彼は笑顔で「ママ、この前の算数テスト、また100点取ったよ、先生から星のご褒美をもらったよ。クラスで4人しか100点取ってないよ…」早く教室に戻れ…と高学年の生徒が大声で催促した。「ママ、授業に行かないと…朝はいつも自分で制服を着て、ミルクを作って、パンを焼いて、またパパの手伝いもする。昼は一階の張おじさんの店で米粉スープ食べる、時々厚揚げを追加して、時々肉のちまきを食べる…」ふっと、鼻に何にか…声も変わった：「ママ、会いたい、すごく会いたい、学校行きたくない、ママと一緒にいたい、ママ、なぜ帰ってこないの？どこにいるの？ママ…」彼は手で涙をふき受話器を置いた、その時「現在は10時11分10秒です」と女性の声が聞こえたのだ。彼は電話から離れて、鼻水を小さな手でぬぐっていた。

この作品は多くの微型小説作品集に収録されている。作者愛亜氏はアナウンサーであり、記者と新聞、雑誌の主編、特に児童版策画主編を務めた経験をもつ。小学校一年生の主人公は、二セ電話で母親に対しての思いを吐き出す情景を繊細に描写している。話す内容から、幼い子供が母親に会えない寂しさがにじんんでいる。母親がなぜ彼のそばにいないのかは明らかにされていないが、子供の目線で、母親はなぜ帰らないのかの問いから、読者に想像の空間を与えている。大人たちの勝手な理由で子供の幸せを奪った現実を描写し、社会へのメッセージであろう。

70年代から台湾で盛んに始まった女性運動の風潮から、社会では男女平等の問題が常に議論され、時代を反映する文学も男女関係と深く関わる婚姻と家庭をテーマにする作品が多くみられた。だが当時の台湾社会において、婚姻と家庭の問題は、男女平等、家庭における女性の地位などに限定されるものではなく、作家たちは広範囲な視点から問題の深層を探り出したのである。

作品②：「フランス人」 愛亜 作

彼はフランスが好きだと言った。(中略)私はフランスに行ったことがないので、彼の意見に同意しないと反論した。彼は少し考えて言った：「フランス人は愛人を容認しているのだ」と言い、ちらっと私をみて、「女性も愛人が容認されているのだ、こんなにロマンチックな国は、嫌いな人いないだろう？」と。結婚してまだ3年しか経ってなくて、愛していると常に言ってるのに、この男はもう愛人を羨むなど、私は悲しくて嫌な気持ちになった。…そして彼は「愛人」の概念をこう語った。フランスの男性が家に帰って、妻の部屋の鍵が掛かっている。玄関に一足男性の靴があるの見て、夫は秘かにまた外出し、近くで散歩してから家に帰って、何にもなかつ

たように妻と夕食を共にするのだという。それから、私は彼を「フランス人」と呼んだ。

ある日、小さな弟がまさか遠い台南からバイクでやってきた。全身の服が汚れたので、シャワーを浴びさせて、ちょうど当日夫は所用のため夕食をとらないから、弟と二人で食事に行くことにした。だが私が部屋の鍵をかけて着替えをしているとき、突然部屋が開けられ、「フランス人」の夫は、片手にカギの塊で、あとの手に木棒を握って、凶暴な顔とまなざしで服を着用中の私を暴力的に部屋から浴室へ連れ込んで、頭を浴槽におさえつけた……なるほど、私は初めてわかった、「男性だけがフランス人になれるのだ」。

ユーモアを感じさせながら、皮肉あふれる表現の作品である。男女平等意識をとらえ、理論と概念だけの妄想から固い意識の壁を突破できないのは、作品の最後に、主人公の一言の嘆きから、当時の台湾社会意識の現実の虚しさが指摘されている。

作品③：「樟脳」 陳克華（1961～）作

それから二人は話さなかった。彼女の手を握って自分の上着のポケットに入れて歩いた。台北にはこのような寒い日は少ないが、彼が着ている薄茶色毛質コートの樟脳の匂いが風で四方に漂っている。急にタンスからとり出して着たからだな、と彼女は彼の肩へ寄り添いながら思った。

（中略）

彼は別にたばこの匂いがひどい人ではなく、男性専用の香水をつけることもなく、また世をすねて不真面目で極端な性格の人でもない。樟脳の匂いは最も家庭的な匂いであろう。寒流が過ぎれば、またコートをタンスにしまい、数個樟脳剤を入れて、来年の冬に着るのを待つのだ。もし来年の冬が寒くなければ、再来年を待つ、それで衣服は常に同じ匂いを発散するのだ。男性の一着の服に対しての思いと、一つの感情に対する思いはどれほど類似しているのだろうか？と彼女は疑問に思った。彼の態度は実用的であろう。なぜならこのコート自体は流行的なものではなく、着用する人自身のきまり的なものがあるべきだと彼女は考えた。

彼女は、ポケットのなかで優しく握られている手にぬくもりを感じながら、二人は目的地なしでゆっくり散歩していた。彼女は樟脳の匂いを嗅ぎながら——突然悟った。今後彼女は今の瞬間の全てを忘れることはないのだ、人生にはこのような散歩ができるのはそう多くないから。そうだ、確かに樟脳の匂いは、人を安心させる「家庭的」安らかな感覚であるが、それは彼の家庭であることを彼女ははっきりわかっているのだ。

作品はある時間の断片を捉えて、その空間に漂う樟脳の匂いから、今後彼ら二人の人生を想像し、そして彼女の無念さを感じさせるのである。

不倫という文学のテーマは、古今において、永遠に語り続けられるものであり特別新鮮な内容ではない。しかしこの作品に描いた彼という人物の典型が、当時台湾の多元的思慮が横行する時代に、ごく普通すぎるきまりのある人間がなにげなく不倫するのは、余計に虚しさを感じさせるのである。以下、このテーマに関連する思理氏の作品を二作取りあげる。

作品④：「雪の夜」 思理（1948～）作

「幸運旅館」は大都会西郊外の数本の高速道路の交差点に位置するため、遠方からの会議参加者は、便利のためにこぞってこの旅館を利用することが多かった。設備も充実していて、スポーツジム、プール、テニス場、特にレストランが有名で、料理の人気が高く、この旅館に泊まり食事をしたいなら、数か月前から予約をとらないといけないほどである。

碧月が旅館を指揮管理し始めたのは2年前の辛社長が亡くなってからだった。辛社長はひとり身で、碧月の聡明さやまじめさを目にして、亡くなる一年前から、旅館を受けついでほしいと懇願したのだ。。はじめは断った碧月だったが、しまいには涙ながら受諾したのだ。

12年前のある雪夜、碧月は長距離バスから降りて、カバン一つで幸運旅館に入ったのだが、当直の職員から追い払われかけた時、ちょうど辛社長がオフィスから出てきて、事情を知ったところで、彼女を留めてくれたのだ。彼女の過去は誰も知らないし、ただ23歳で路頭に迷ってここに来たということだ。当時の辛社長はまもなく70歳になるところだった。その後、辛社長は彼女の移民資格をとるのを助け、最近の数年は旅館の設備を拡大し、碧月は旅館事業に精を出した。テレビの取材を受けた折、辛社長の横に座って「ミス辛」と呼ばれたときには、相手に「碧月」と呼んでくださいと言ったこともあった。辛社長の臨終前、最後に一言——「怨念は解消しなさい」と言った。彼女は辛社長の体に伏せて大声で泣いた。彼が去っていくことの悲しみのためではなく、その理解に対する感激だった。それは一人の父親でさえできない理解だった。もう去っていくのに、心配したのは、彼自身が異郷で作り上げた企業ではなく、彼女が抱き続けた難解な心のかきぶただった。それは彼女が語ったことがない過去なのだ。（中略）

この日、降雪の予報があった。碧月は30歳の時、辛社長からもらったプレゼントのGM車の白いビュイック・ベラーノを出して、二階に上がって、白い毛布をとって車の後部座席に入れた。（中略）7時過ぎ、彼女は旅館のそばにある教会へいき、車が止まると、そこで待っていた人がすぐに車に乗り込んだ。彼女は無言であり、その人も話せないが、両手をもみながら落ち着かない様子だった。（中略）車は郊外の樹林の前に止まって、あの人に降りるように示した。その人は車を降りて、雪の塊が体に打ちつけてきた。彼は震えていて、碧月は後部座席から毛布を親切にかけてあげたのだ。彼は感動して彼女を抱擁しようとしたのだが、彼女はすぐさま彼を突き離れた。その木の下で待つようにと伝えて車を発車した、バックミラーからみえたその人は白い毛布を掛けて追いかけてきたのだが、それがひとつの小さな黒い点になったのだ。

12年前、西の小都市。あの人はアルバイト先のレストランの娘が自分に居留資格をくれるという理由で、長年相愛の仲であった碧月を郊外へ連れ出し、事前に用意したカバンを彼女に投げて自分だけ去ったのだ。12年後、彼は仕事でここに出張でやって来た。数か月前、碧月が客の名簿から彼が来ることを知ったのだ。彼が仕事を済ませてから誘ったのだ。その夕方の小道は、雪で埋まって川のようなだった。噂では、あの林に黒豹が出没して、まだ捕獲されていないようだった。

作品⑤：「月下美人は咲いた」 思理（1948～）作

彼女は彼がカウンターで荷物を出して、出国手続きするのをそばに立って見ていた。手続きが終わると、彼はもう待たなくていいと言ったが、彼女は無言で待合室について来た。これまでの数年間、同じように毎回ここに座って待っていた。時間になれば、疲れた彼が一人で出発へ向かった。彼女は彼の後ろ姿を見ながら、また来年の再会をカウントダウンし始めたのだ。彼女はそのまま座って、窓ガラスから彼の見知らぬ人のように太った体を見ていた。何ごともないように偽って、待合室を見回ったのだが手に冷や汗がびっしり。時々彼の顔を見て、少しの未練と寂しさが隠せるかなと思ったが、彼の顔は空白の表情でしかなかった。その太った体から、彼女が想像でしか知らない彼の人生があった。…突然彼は手を振って——「気を付けて、二人の子供はめいわくかけるがよろしく頼むよ」と彼女に言った。彼女は右手を上げて分かったと彼に示した。彼は通路へそして今後見るできない後ろ姿を彼女に見せた。車に戻った彼女は、大声で泣き出した。（中略）

子供を海外留学へさせたのは、彼？それとも彼女だったのか？彼女は子供のことが心配で、面倒を見るために外国までついてきたのだった。年に一回彼が会いに来てくれる。最初は新婚気分でよかったが、慣れてくると、公務を済ますように往来して、定期的に家族三人の生活費を送ってくれた。子供たちが大学入学すれば、台湾に帰ると約束したが、いまはその必要もなくなったのだ。今回彼は離婚届を持ってきて、彼女にサインするようにと巨額の送金をくれ、責任もって分かれると考えられた。このままの関係を継続するのか、または離婚届を郵送するだけで済ませるのはよくないと思った。

家に戻ってすぐ子供たちから話があった。「ママたちが行った後、月下美人が咲いたよ！大きくて、香りがとてもよかった」。この月下美人はすでに数年も面倒見てきたのに開花したことはなかった。少し前、子供がつぼみを見つけ、興奮して口をそろえて——「パパが来てから開花してくださいね」と祈ったのだ。彼が来てただ一日留まったのだが、子供たちには忙しいから長く泊まれないと言い聞かせた。彼女は振り向いて、子供たちに大切な話があると、力なく声をあげて泣き出した。咲き終えた月下美人の花弁は丸く萎んで、幕が降りた後のバレエの踊り子のように、疲れきった姿を厚い緑葉によりかけている。

作品④と⑤を取り上げる理由は、単に恋愛婚姻が人間の営みに欠かせない永遠のテーマだけというわけではない。物語に共通する台湾社会の特殊な時代背景で起きた留学風潮と関わり、文学史に重要な位置づけをされているからである。これまでアジアを中心とした多くの地域の微型小説を研究してきたのだが、異国生活におけるさまざまな理由で問題と情緒を描写する作品が多くみられる。またアジア地域からアメリカへ留学する現象は、ごく普通にある現象である。台湾社会における留学の概念は、実に長い歴史背景に由来する。特に作品④に描写する若者の留学について、彼らがアメリカにとどまる要望が強いのも時代的特徴であり、そして長い歴史が関連するのである。

アメリカへの留学について、1909年から1911年まで、清朝がアメリカから「庚子賠款」の退款

を受けるため（注10）、中国でアメリカ留学の予備校である清華学堂（現在北京と台湾新竹にある清華大学の前身である）を設置し、中国の留学生を受け入れ始め、留学意識が社会で定着したのである。その後、政治的環境の激変で、一旦留学風潮が下降をたどったのだが、1949年以後、台湾側においてはアメリカとの政治経済関係が密接になったため、開発国段階である台湾から絶えずに大勢の優秀な大卒生が、アメリカで進学研究を進められることが最高の理想と考えられた。1962年「国外留学規程」が修訂され、留学の熱潮が頂点へたどり、さらに1979年国外へ観光する門戸が開放されるに至っている。それまでの就学、商業、親族訪問などの理由制限から解放され、より自由に出国できるようになった。だが5、60年代でアメリカへ留学した若者たちは、当時の台湾社会環境が彼らの将来性を満たせないと考え、そのほとんどがアメリカへとどまることを目指している。この社会現象から、異国で奮闘する若者の新たな人生挑戦の現実が文学創作の題材になり、社会へ大きな影響を与えたのである。当時第一世代の留学生作家於梨華氏の有名な小説《又見棕櫚・又見棕櫚》（注11）が出現すると同時に「留学生文学」の經典作と評され、留学生が異国での境遇と苦悩を描写する創作風潮が開かれ、特定する文学現象と見られ社会に定着したのである。後に作家の白先勇氏が《流浪の中國人——台灣小説的放逐主題》（注12）中に、於氏は「沒有根的一代」、ルーツを失落した世代の代言者と評し、「留学生文学」の作品が多く出現して研究の対象にもなったのである。この文体自体についての評論は多くの視点と見方があり、本論の研究目的ではないので省略するが、文芸界の新たな現象だった事実に注目したい。実はこの社会現象が一貫して消えることなく、形を変えて継続されていることは、この2作品を通して、それぞれの問題提起に関して重要視せねばならないと考える。

作品④は、極短篇の創作として、時代性を十分に捉えた作品である。台湾に戻りたくない主人公たちにとって、雪夜に、カバン一つで愛する人に捨てられた碧月の悲惨さ、そしてアメリカに留まるため、無情にも長年つれそった彼女を荒野に捨てた彼。さらにもう一つ前時代の異地で奮闘する華人移民の辛社長、アメリカで生きる困難に満ちた境遇中、悩み、恨み、奮闘して自立する実態を繊細に描写している。彼らのそれぞれの心境と運命は、単なる空虚な想像ではなく、その時代を生きぬいた大勢の人々の人生ドラマに他ならない。

作品④に描写した台湾社会の時代風潮が薄れてくると、今度は作品⑤の時代へと突入したのである。作品④の主人公たちはほぼ大卒した若者であるが、作品⑤に留学するのは低年齢層の子供たちである。彼らは「小留学生」と呼ばれ、実際この風潮は台湾に引きつがれ、中国大陸にも広まり、一時期アメリカ東部に数万人の小留学生がいるともいわれた。精神的未熟な子供が単身で海外留学へ向かう状況中、言語と異文化社会に適応できないなど、多くのトラブルに巻き込まれ、さらに犯罪まで走ってしまう事例は少なくはない。この点に関して、社会は常に表面的子供の立場から、問題視され様々な場で議論されている。だが作品⑤は、一般的視点と違い、留学する未成年の子供だけの問題を取りあげるのではなく、問題の深層を探るため、子供たちの背後にいる親、彼らが抱える責任を果たすために、多大な犠牲を払う大人たちの悲劇の実像を描写したのである。作者は、エッセイ、小説、文学評論など多くの文体の作品を多数発表している。かつ台湾

社会の留学風潮の変化を直視できる世代である。このテーマを作品④と⑤を「極短篇」文体で発表して社会へ訴えたことは、当時の極短篇小説の社会文芸における位置が重要視されていることを明確に示したと考えてよい。

作品⑥：「往事」 隱地（1937～）作

「明星コーヒー喫茶店」にいれば、多くの往事が浮かんでくる。若者は大体コーヒーが何であるのかわからないし、自分にとってただの苦い水のようなものである。だからいつもレモンジュースを頼んでいる。最初に「明星喫茶店」へ行ったのは、原稿を書くためだった。それから友だちとおしゃべり、彼女ができてからは、デートで愛を語る時も、喧嘩をする時も、最後に分かれる時もここであった。

その日、彼女の父親と一番上のお兄さんは、怒った顔で僕に彼女と別れるようにと言ってきた。当時の私は若いし、適当に返事をしてあとでこっそり彼女と付き合えばよかったのだが、別れたくない自分はずっと頭を振って、双方とも譲らぬ場面が暗礁に乗り上げてしまい、お兄さんは、怒った顔で僕に「よし、先に話しとくが、もし妹と会ったら、ただじゃすまないぞ…」と言った。父親は彼を止めたが、でも怒ったままに「顔を潰したくないが、慎重に考えろ、うちの家族全員が君を歓迎しないのだ、なぜ私の娘を放さないのか、君の条件ならいい彼女を見つけるのは簡単だ、しかし私たち台南人は、外郷の人とは結婚しないのだ」。

その後二、三十年も過ぎて、いろいろ過去のことはすでに忘れてしまった。あの日三人で睨めながら対決した後、彼女と長く育んだ愛情も段々と薄れて痕跡を残さずに消えてしまったのだ。しかしここに来れば、なぜかその遠い昔の出来事をよく思い出すのだろうか？

作者の隱地はこの作品集の編集者であり、1992年に《コーヒーを愛する人》のエッセイ集を出版している。作品⑥の制作年代を考えると、当時特に若者世代にとって、喫茶店でコーヒーを飲みながら集うことは、お洒落な新風潮であった。彼がこのエッセイ集を出版する前に、よく色々新しく洒落た喫茶店を見つけて、当時の作家たちと集まって文学を語り合い、この本の出版は台湾における最盛期の文学の記録であるともいわれている。(注13)

作品⑥の主人公にとって、当時若者の新思潮を育むお洒落な喫茶店は、実に人生最悪の劇を上演された舞台でもあった。彼女の父親が言った最後の言葉「私たち台南人は外郷の人とは結婚しないのだ」との考えは、まさに台湾社会が長年経験し続けてきた「省籍意識」の衝突を露呈したのである。約三百年以上前から、現在通称「本省人」が中国大陸の福建省沿海地域から生活のため、大勢の人が台湾へ移住してきたのである。当時現地で先住民との矛盾と闘争が続く中、移民たちは出身地の相違による県人同士の対立も激しく、命がけの械闘が頻繁に起こっていた。1945年以後には、国民政府の入台によって、後に「外省人」と言われる人たちが中国全国から台湾へ移住することになった。戦後の政治社会が混とんする中、様々な不幸事件が起こったため、今度は社会の歪みとして、本省人と外省人の対立と衝突がみられ、その溝と後遺症は、現在までもあらゆる形で台湾社会を侵食している。世界には民族、宗教などの理由で、特定な結婚対象を拒む

事例は別に珍しくはない。作品が描写した年代は、作者自身も外省人であり、彼自身の経験ではないとはいえ、当時の台湾社会においては、等身大的共感できる現実だったと考えてよい。実際主人公が一生涯忘れられない悪夢の舞台は、時代の変化と発展で、ファストフードなど多元的新型営業形態のものに取って代われ、人々も思考の選択肢が多分化した社会環境に代わっていた。しかし現在でも「往事」が描く不条理さと差別は、さらに後の政治利権など様々な形での争いに利用され、変質した民主意識形態が常に台湾庶民間の矛盾を煽り、社会の分裂と対立を鼓動し脅かしている。作品最後に、結婚相手の選択権を狭窄な個人的意識感情に奪われ、作者が主人公の自問に託された無念と期待は、作品発表当時から20年以上経った今日においてもその思いは現実性を感じさせるのである。

これまで取りあげた作品には、婚恋と家庭問題をテーマにしたものが多いが、以下は別の視点の作品を見よう。

作品⑦：「真珠の壊滅」 陳幸蕙（1953～）

彼は彼女を好きになり、彼女と心が通じ合っていると感じ始めたのはあの年の秋だった。それまで双方の親はすでに彼らが結婚すると考えていた。双方の家は旧交であり、彼ら二人は同じ学校に勤務しているし、最も適切であると思っている。しかし彼は、やはり富裕層家庭のお嬢さん育ちであることに對し不安を感じ、恋愛関係はうまく進まないのだ。（中略）あの秋、彼女と陽明山夢幻湖へ。湖中に月が投影され、同じ「水月」景色だが、古人范仲淹「岳陽樓記」文の「靜影沉壁」と唐代詩人白居易の「月點波心一顆珠」句の比較を彼女に尋ねたら、「当然白居易の方がいい」と、彼と同意見だったのでうれしく思った。さらに「珠」と言うのは立体感があるし、自分は真珠が好きだと言った。（中略）

冬休みに二人はアメリカ西海岸へ旅行をした。日程の最後にはサンディエゴの「海洋世界」へ行った。突然彼女は、真珠の指輪が欲しいと呟いた。それで彼らは養殖の池で真珠を購入しよう。職人たちは日本の北海道からきて、礼儀正しい和服姿だが、珠を取る方法を見ると、実に残忍すぎてナイフで殻を切りあけ、指でまさぐり体内の真珠を絞り出した後には塩をまぶし貝肉をゴミ箱へ投げ捨てていた。まさか美しい真珠の背後にこんなにも残忍劇があったと思い、彼女にやめようと勧めたのだが、彼女は先の真珠が小さく、もっと大きいのが欲しいと…それから色に不満で再度別の貝を要望したのだ。真珠採りの職人たちは女性たちの贅沢、虚栄心、もしくは残忍性に慣れた様子に見えたが、ようやく6枚目で取れた真珠が彼女は気に入ったようだ。彼はちらっとゴミ箱に乱切りされた形のない貝の死体を見て、無言で彼女の真珠の指輪を注文してお金を払ったのだが、気持ちが突然沈んでしまった…台北に戻ってから、彼女とは礼儀上だけの同僚関係になってしまった。

真珠好きな女性は必ずしも真珠のような綺麗な心を持っているわけではない。これは彼の結論だった。その後、彼はデートする女性に同じ質問をするが、しかし必ずしも白居易がいいとの答えにこだわることはなくなったのだ。

作品は真珠を取りだす過程から、女性の贅沢、虚栄心の追求を描写したのである。もちろんこのような心理状態は女性に限るものではない、しかし同時に誰にもこのような素性がある。男女関係の愛情の重要なカギは他人に対する思いやりであるというが、作品を通じて、実際男女関係だけに限らず、全てのことに對し、人々は貪欲で、表面だけの美しさに魅了され、真相が隠れてしまうことに警鐘を鳴らし訴えている。

作品⑧：「ふとる」 鄒敦伶（1967～）

彼女の体重はどんどん増えている、もう90キロ台に突入したのだ。…自分では、美容宣伝資料の影響から「痩せることは美しい」、「人間は自分の体重を管理できて初めてほかの仕事ができる」、理論は十分に認識している。頑張ってダイエット、運動したのだが、結局ストレスになるばかりだった。…外見で妊婦と誤解されて席を譲ってもらった経験も数度あり、若い子からはおばさんと呼ばれていた。

ある日、寝る前に三回「自分を嘲笑するんだ」の声が聞こえたが、そばには誰もいなかった。翌日、自分で作った筒状のワンピースを着ていたら、人は「色柄がいいね」とほめてくれた。普段なら彼女は淡々と微笑むだけだが、今回は「自分で作ったのよ」と、返事をして自嘲するつもりだった。「すごいね！」予想通り、同僚は驚いていた。「私はこんなに太ってるから、自分で作らないと売り物ではサイズが合わないのよ」。初めて同僚が人の弱みを刺して申し訳なく思う表情をしたのだ。昼休み、彼女は編み物をしながら同僚と雑談を；「だんだん寒くなり、今年は昨年より太ったし、早くカーディガンを編まないよ。この前店に行ったら、合わせやすいデザインのをたくさん見て、自分も作ろうと思ったのよ」。これ以来、彼女と一緒に編み物をする同僚が増えたのだ。友人から結婚相手が見つかるかもと登山を誘われたとき、「私の山みみたいな体型、男はびっくり仰天して逃げてしまうわよ」と、友人は大笑いし、彼女も重荷から解放されたような気分だった。（中略）他人の大笑いをみて、彼女はこれまでの太ることを避けて触れないよりも、気楽で楽しさを感じたのだ。（略）「ゴロゴロ転がれば下山できるさ」と彼女をからかうと、「そうなんだ、太平洋まで行けるのじゃない、途中で何人もひかれて死ぬかもね！」と言った。時には相手が彼女を笑おうとする言葉が見つからないと、逆に自ら自嘲して言い出したら、友人が申し訳なく反省して大泣きしたこともあった。そして開放的な彼女は彼氏を見つけた。背が高く、痩せている。二人が一緒に歩いていればとても異様な感じだったが、誰も自然だと受けて噂にすることもなかった。

作品⑦と⑧の描写は、人間性の裏表を探る点で、共通する理念で表現している。人間は外在美を追求してそれに執着するとき、堂々と背後に隠れた残酷な過程を忘れ、無視するが、また醜い弱者に對し、その弱みを掴み、遠慮せずに攻撃する悪的素性をもっている。太ってる彼女は、そういった人間が無意識または故意に他人の欠点をからかって自己満足する心理に對し、被害者である自分が逃避するよりも自己解放することで、自他ともに理解し合えると悟ったのである。しかし、彼女のように心を開いて、自分をさらけ出す勇氣はそれほど容易ではない。

ここまで取りあげた作家たちは、多くの創作範疇において活動を行った実績がある。第二章に述べたように、この作品集の編集時には、極短篇創作活動が隆盛な時代背景があり、その発展から世界微型小説の展開過程においても有力な成果を得ている。世界における微型小説の発展が定着をみて、一層の広がりを示すなか、台湾地区においての進展または将来性について考えたい。以下は現在台湾の極短篇小説の発展と若い世代が受け続く現状について考察する。

V 若年世代の創作活動について

時代の変遷にともない、創作活動の内容だけに限らず、その形態にも大きく変化が見られる。台湾極短篇小説の創作活動は、多くの公私的サイトにおいて作品が発表されている。ネット上に「台湾極短篇作家協会」の名称をもつサイトもある。さらに高校が学生極短篇創作コンクールを行うなど、後進の若者に創作と発表の機会を与えている。現在の華文微型小説の創作について、世界の特にアジア地区において、このような方式で若者世代の作家たちを育て、創作活動を応援することが普通に見られる。実際筆者は2014年香港地区中学生微型小説創作コンクールの受賞作品の作品集を取りあげたことがあり(注14)、作品を通して、若年創作者たちの創作思考を考察したのである。ここでは台北市の教育局が主催する行事であり、台湾の高校生コンクールの「極短篇類」を受賞した二作品を略訳して取りあげ、現在の若者の創作の思考意識と特徴を見よう。

作品⑨：「お祖母ちゃんたち」 彭小檀（台北市立中山女子高校）2018

これは遠い昔、人類が住んでいる星が爆発して以来のことだった。今人類は宇宙に住み、科学の進歩で平均寿命は千歳で、病気は全て治るし、壊死した臓器も人工物と変えるので、死亡はもう遠い先のことになったのだ。うちの女性は楽観的で、男性はなぜかみな120歳ぐらいで安楽死を求めるのだ。私には30人のおばあちゃんがいる。皆優しく、母から常にお祖母ちゃんたちの面倒を見ないといけないといわれている。だが人数が多すぎて、名前と顔が覚えられないため、母から教わって各おばあちゃんの飾りもので識別できるようにした。例えば赤いスカートを穿くおばあちゃんはいつも私と一緒に本を読む。(中略) ある日、鯉琪おばあちゃんがなくなって葬式を挙げないといけない。でも誰かわからないので、母に聞いたら「碧色のピアスつけているお祖母ちゃんだ」と、教えてくれたので思い出した。数年後、母は青いスカーフつけるお祖母ちゃんになった。私には子供ができ、孫ができ、まだひ孫ができ、また(中略)…私は紫腕輪をつけるおばあちゃんになった。…(中略) 母が亡くなった。曾曾曾曾…孫が葬式を仕切って、私の母の名前は知らないの？と彼女に聞いたが、「紫腕輪のお祖母ちゃん、あなたのお母さんは青いスカーフお祖母ちゃんだ、でもすみません、私は青いスカーフお祖母ちゃんの名前は知らないの、それにあなたの名前も知らないのよ」。別の曾曾曾曾曾、…孫にも聞いたが、「知ってるよ、あなたの名前は何だったかな？紫腕輪のお祖母ちゃんじゃない？」、ああ、私は紫腕輪のお祖母ちゃんだったかも知れないな？

作品⑩：「左手」 段戎（台北市立第一女子高校）2017

オリはいつも左手の悪夢をみる。夢は暗闇の中で、一番覚えているのは後ろから左手を切り落とすための刀が飛んでくる光景で、彼は逃げ回るしかない。この夢は繰り返され続け、オリは自分が夢見ていることが自覚できるほど回数が多かったにもかかわらず、その恐怖心が少しも減らないのだ。彼ははっきり覚えている。ある時、逃げまわって疲れ倒れて、飛剣が飛んできて左手を切り落とされ血だらけになった。意識がぼんやりする中、誰かがこちらへ向かってやってくる。直感でこの人はいつも追殺する首謀者だと、痛みをこらえて目を開けてみたら、驚いた——彼の母親だったのだ。

オリの母はとても彼を愛しているが、彼の人生の全てを支配しているようだ。オリの左利きは許せないことの一つなんだ。彼の左手を棒でたたき、「もう左手使うな…左手使う人は右手使う人より衰えている。左利きで他人に負けるのは絶対に許さない」と、火傷したような痛みが絶えないほど損傷を受け、左手はもはや廃物のようにペンを持つ力さえもできなくなり、その時から、オリは悪夢を見始めた。しかし悪夢のことは母親に話さなかった。彼は家の一人息子で、母親を失望させることはできないのだ。障害をもつ左手を見て、誇りを感じ：これはまさに成功への道で、母親へ恩返しの象徴だ。悪夢は試練に過ぎないのであると思った。大学受験の前日、彼は悪夢を見なかった。

（中略）受験日の試験場へ向かう途中、樹の上に登って降りれなくなった子猫を見つけた。助けようと思い、左手を使って猫を掴んだのだが、力が弱くて猫を落とし地面にうちつけてしまい、子猫は恐怖な眼差しで彼をみて命を失ってしまった。その後、彼も木から落ちて意識不明になった。夕方、彼は痛みから目を覚ますと、子猫の死体がそばにあり、腐敗で虫がわき始めたようだ。受験の時間はとっくに終わり、彼は子猫を拾い、何にも考えずに家へ戻った。母親の驚きの顔と質問を無視して、自分の部屋へ入ってドアを閉めた。その夜から子猫が彼の夢に入ってきた。

作品⑨は、SF風の構想から人類社会未来の深刻な現実問題を描いている。人類が宇宙へ移住し、平均年齢も千歳になり、主人公には30人の祖母たちがいる、母親は祖母の面倒を見るが、ある祖母の葬式で、祖母たちの人数が多すぎて識別できないために戸惑いと混乱が起こっているなど淡々と描写している。十代の若い作者の目線で、これから先の高齢化社会と人類の将来像について様々な問題提起をしている。

作品⑩は、子供の立場と感覚で、左利きという生理的天性に対し、自身の左手が母親の偏った厳しい競争原理に潰される過程を描写している。大事な成長期に心と体が受けた傷の深刻さを覚悟しながら、悪夢を見続け、母とその誤った価値観に対し、逃げ回るしかできない自分の哀れな無力さと恐怖を訴えている。両作品の内容と構想、そして芸術的表現について、若年作者の思考からその問題意識と時代の特徴が顕著に表れている。

終わりに

台湾地区の極短篇小説の発展は、世界のほかの地域、特に東南アジア華人地区に比べて、創作テーマと言語表現において、それら多民族国家の要素と影響を受ける地域とは大きな相違がみられる。世界の「華文文学」として、国共内戦後、台湾地区が本土中国大陆と政治的に対立する現実があるにもかかわらず、一貫した中華文化地域であり、主言語華文中心の教育の実施と同時に古典から現代中国文学も伝承し続けてきたのである。歴史上50年間（1895-1945）、日本の植民地支配をうけた時代に日本語教育を強制された面で、大きなダメージと後遺症が見受けられるが、戦後の国民党政府の徹底的華文中心の教育制度が推行され、主言語の中国語を復活させたのである。元来中国文学伝統の基盤が深厚性のもとで、文学において、極短篇のほかに各ジャンルの創作を含めて、作者たちの華文創作の表現力が高いのは明白である。

以上、台湾作家たちの極短篇作品を見てきたが、華文文学の本拠地の一つとして位置づけができるこの地区の文学は、これからも歴史、政治、経済の変化が続く中、「極短篇」（華文微型小説）の創作も含めて、多様性を持った強力な華文文学の創作の場であり、作者たちの思考と社会意識も進化し続け、優れた作品を多数産出できることが期待できる。

注

注1：「現代文学大系」の編纂における台湾社会時代意識の変化への一考察 筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要第2号 2007

注2：台湾社会における「探親文学」の位置づけと時代的意義についての一考察 筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要第4号 2009

注3：中国現代文学における「微型小説」への視角 筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要第1号 2006

注4：「世界華文女作家微型小説選一編後記」 欽鴻主編 上海人民出版社 2004を参照。

注5：「爾雅極短篇」 隱地主編 爾雅出版 1991

注6：「微小説序集萃」 凌鼎年著 中国方正出版社 2016（頁20～22）に「亞洲、世界華文微型小説的大本營」文を参照。

注7：「現代文学大系」の編纂における台湾社会時代意識の変化への一考察 筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部紀要第2号 2007を参照。

注8：「台湾文学風貌」—80年代の台湾文学 李瑞騰著 三民書局 1991を参照。

注9：1978年復旦大学の学生盧新華が文革時代の母と娘の悲劇を描いた「傷痕」の作品より「傷痕文学」の用語が生まれたのである。

注10：清朝政府は1901年9月7日庚子年で発生した義和団事件で、世界八か国の聯軍が中国へ出兵し、清が敗戦後ほかに相関11か国「辛丑条約」を結び、支払った賠償金が「庚子賠款」と名付けられ

た。

注11：留学生生活を描写した長編小説 於梨華著 皇冠出版 1967 同年「嘉興文藝獎受賞」

注12：白先勇氏「第六本指」に収録。爾雅書局 1995

注13：《文訊雜誌》2015年7月號「咖啡之前・咖啡之後」專題文参照。

注14：「世界華文微型小説に関する一考察—『世界中学生華文微型小説コンクール優秀作品集』を中心として」筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学部人間文化研究所年報第24号 2013を参照。

主な参考資料

当代台湾作家編目（1949～1993）張默 隱地編 爾雅出版 1994

微小説序集萃 凌鼎年著 中国方正出版社 2016

臺灣的文學與環境 江寶釵 施懿琳 曾珍珍編 麗文文化出版 1996

台湾文学風貌 李瑞騰著 三民書局 1991

（せき きりん：アジア文化学科 教授）

台湾現代文学における「微型小説」への視角

石 其 琳

Viewpoint on Short Short Stories in Modern Taiwan Literature

Kilin SEKI

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第30号
2019年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 30
2019